

出会いと対話と文化芸術をめぐる未分化な表現の検証と評価指標について

大阪芸術大学 芸術計画学科 准教授 中脇健児

本研究は、近年、文化芸術分野において求められている「社会包摂」を軸とした社会課題への関与やコミュニティの再生・創造、他分野との連携・協働が重要な役割として期待されていることへの実践と行政で実装できる評価指標の検討である。自治体では、依然として文化芸術事業の評価は集客数や収支率といった結果指標が中心であり、上記目的の文化芸術で重視される対話や関係性の変化といったプロセスの価値を定量的に評価する指標は存在していない。その課題に取り組み、実際に実装させていくのが本研究の意義である。

そもそも本研究はその課題を反映した伊丹市の文化振興ビジョンの策定に研究代表者が携わったのを契機とする。策定後から本研究は始まったのだが、まず最初に伊丹市の文化振興課との協議を行った。評価指標における結果は従来通り年間来館者数のカウントと、市民意識調査における「1年間に文化芸術を鑑賞・体験したことがあるか」とをとることとした。そして、今回研究テーマとして掲げる「関係」の評価指標は、他分野と連携した取り組み事業数のカウントをすることと、実施事業が新たな取り組みへと派生した事業数である。

次に「過程」の評価指標は、相談件数やサポート事業数、実施事業中に発生する対話時間といったものの定量化を試みることにした。

次にこれらを既存の文化施設に試行段階として3年間実施してもらうことにする一方、パイロット事業として幾つかの事業を本研究で実践し、早期にその可能性や実感を結果としてまとめることにした。

パイロット事業として取り組んだのは、以下の3種類である。

- 1、文化芸術という取り組みに設定しにくい手作業(つくる)や営み(食事や風習)を通して、協働的な取り組みを実践すること
- 2、既存の「アート」領域における事業に対し、協働的な要素と多分野連携を視野に入れた実践をすること
- 3、事業の立案から実施、ふりかえりといった一連の流れまでに対し、「関係」指標や「過程」指標を意識して取り組むこと

実践については、伊丹市に限らず、この3種類のいずれかに興味を示してくれた団体・地域で実施した。二つ目の取り組みは、耳原総合病院と介護施設を営む社会医療法人同仁会が、昨年6月に堺市大仙西町にオープンした地域コミュニティ棟「みみっば」での屋台づくりワークショップである。ここでは、医療関係者のみならず、法人会員や地域の方、大学生が混ざり、

協力しあいながら、また食事と一緒に作り食べあう時間を過ごすこととなった。「関係」「過程」の指標双

方に充実であり、またここからの派生としては、屋台を活用したイベントの実施や、会員の拠点での屋台づくり活動につながった。

二つ目の取り組みは、障がいを持った人たちのアート作品と、現代美術家の作品を分け隔てなく展示する展覧会での関連企画で実施した音楽ワークショップである。これに関しては障がいを持った方、こども、美術関係者、音楽関係者などと協働的な時間を多く過ごした。「関係」指標については、福祉や文化芸術というように幅広く十分であったが、「過程」指標においては、実施事業中の対話も少なく少々評価しにくいものであった。一方でレビューや、それが英語併記もされたため、報告書として多くの関係者に広められることは実現できたので、この点をどのように評価することが検討事項であることがわかった。

三つ目の事業の立案から実施、ふりかえりであるが、これに関しては、伊丹市で実施し、公民共同の実行委員会と指定管理者の財団による両主催であることから、打合せにおいても、合議制の会議を経ながらつくることができたため、「関係」「過程」共に充実したものであった。さらに本番も地域住民、学校関係者、学生、研究者、行政、文化施設職員、福祉の中間支援職、福祉団体、音楽家、こどもなども参加者として関わってもらいながら、終わった後、全員で対話の時間も設けたことで、参加者同士の新たな交流から何か新しいアクションに発展しそうな息吹を感じた。本番後に対話の時間などまで設けたことで「関係」のみならず「過程」評価の定量数値も飛躍的に良い数字が残せることがわかった。

最後にこれらを冒頭に設定した伊丹市の評価指標にそれぞれ落とし込み、検証をした。ここでわかった課題点は二つある。一つ目は「関係」の評価指標の問題点であった。当初、他分野と連携した取り組み「事業数」を定量化の単位としていたが、事業数では、連携先の多様さが反映されない。そのため、「事業数と連携領域数」が適正ではないかという点である。

そして次に、3種類のパイロット事業で評価の基準が適切に発揮されなかった「既存の「アート」領域における事業に対し、協働的な要素と多分野連携を視野に入れた実践をする」もののレビューなどの報告レポートをどう「過程」評価に組み込むか、という点である。

本研究では、こういった課題点を抽出することそのものが目的であったため、これを踏まえての伊丹市との協議は、引き続き実施していきたい。概ね、当初の評価指標は機能することもわかったため、今後は多少の変更と、目標達成の数値目標をどれくらいにするかであることも見えてきた。